

亀山郁夫著

## 『世界が終わる夢を見る』

名古屋外国語大学出版会、二〇一五年

蔵田 敏明



それでも人は生きつづける。

如何ともしがたい運命に翻弄されながらも、自分ではどうにもならない、人智の及ばない何かにあやつられながら、それでも人は生きつづける。

本書『世界が終わる夢を見る』の中に登場する、著者があえて取り上げた人物たちが、まさにその苦海に生きる人々である。

日本において物語とは、物(モノ)を語ることで、本書でも「憑依」のことが随所に出てくるが、ことを介してスピリチュアルな聖域に触れることである。実は『源氏物語』を書いた紫式部も執筆しながら慄(おそ)っていたのである。千年前は末法思想の渦中にあつて、仏教における狂言綺語の罪を恐れていたが、それでも作家の抱えている、ことばにできない混沌たるものは今も昔も脈を同じとする普遍的なものであろう。まるで巫女のように人間であることを離れて、いのちをふりしぼって書かれた物語ゆえに、それを読むことによつて人生の恵(めぐみ)びを味わい、生きるエネルギーとなり、ときに警句となり、自戒となり、カタルシスとなり、救いとなった。

しかし、文学が力を失ったと言われて久しい昨今、バーチャルリアリティが現実を凌駕し、文学の中だけに救われていた隠蔽されるべき猟奇的な事件が、茶の間のワイドショーで流される話題となった。「人生は小説より奇なり」が穿った形で独り歩きし、バイロンもびつくりである。

ところが小説の道具立てとなつてきた奇想天外なもの影が薄くなり、文

学の行方が、本頁の各処で案じられている。だが、通読してまず思ったことが、なんと贅沢(ゆづえ)な、そしてこの現代だからこそその文章読本だ、という感嘆である。

著者の文芸論に加え、現代日本を代表する作家、高村薫・辻原登・平野啓一郎・中村文則との対談を織り交ぜての構成である。この作家たちにはドストエフスキーの愛読者で大きいなる影響を受けたという共通項がある。いわんや著者はロシア文学・文化の研究者で、ドストエフスキー作品の斬新な翻訳でブームを起こした人物である。対談の中で辻原氏が「翻訳は小説を書くのと同じだと思う。僕も小説を書くとき、一種の翻訳をしているんですよ。僕の中にある、無意識の本の世界を、どう自分の言葉で表現するか。小説を書くということは常に翻訳作業だと思う」と語っている。「ロシア語から日本語に移すのも一つの創造」という辻原氏のことば通り、著者は研究者である以上に作家である。

本書で著者が読書観を展開することが、図らずも文体研究になつていて感動した。作家は、何もなしどころから言葉を紡ぎ出し、物語として綴つていくのだが、近代に小説が入つてきてからストーリー重視で表層を撫でるに終わる読み方が横行している(現代人の読解力の未熟さ、国語力の低下も相俟つて)。ところが著者の読みは深い。その一節がどこから派生したものか、何に影響を受けてその一文が出来たのか、実際の作者を前に読み解く。そこまでの深読みができるのは、ドストエフスキーに精通し、微に入り細を穿つて研究し続け、新たな日本語を編み出してきた著者だからこそその眼である。まるで炙り絵のように、人には見えない行間を読み解けるのである。著者もそれがわかつていて、独りほくそ笑んでいる、そこがまたオモシロイ。

表題である『世界が終わる夢を見る』にある、如何ともしがたい災禍に遭い、もう息をすることも無理だと思つほどの苛酷さに晒されても、それでも人は生きつづける。未来は想像できず、答えはない。著者は先の東日本大震災に衝撃を受け、それが本書執筆の動機となつているが、平安時代の人々も同じ場所で大津波に遭い、戦禍を蒙り、それを宿命(すてい)と受け止め、未来に繋いだ。文学の力も、その使命も、人が人であるかぎり廃れはしない。本書を読んで、忘れかけていた原作を再読したくなつた。